

第 6 学年体育科学習指導案

指導日時 平成 19 年 9 月 26 日 (水) 5 校時
指導学級 6 年 3 組 男 16 名 女 17 名 計 33 名
指導場所 体育館
指導者 田代 英樹

1 単元名 「目指せ 10 点満点！」(器械運動 - マット運動)

2 単元について

(1) 教材観

第 5 学年・第 6 学年の器械運動領域のマット運動の内容は「主として回転系や倒立系の技の中から自己の能力に適した技に易しい条件の下で新たに取り組んだり，それらの技がある程度正確にできるようにしたりするとともに，同じ技を繰り返したり，技を組み合わせたりする。」である。

マット運動は回転，倒立，ひねり，腕支持などの非日常的な運動形態をもつ運動である。そしてそれらの運動を行うためには，回転感覚，ひねり感覚，逆さ感覚，腕支持感覚などの様々な運動感覚が必要となる。それらの感覚は経験的に身に付いていくものではあるが，児童の生活様式や遊びの質が変化しきている現代社会においてはそれらが十分には身に付いていない場合も見受けられる。また，1つの技を完成させるには様々な運動を連続的且つ協応的に行う必要があり，児童にとって技の習得は容易ではない。

この運動は，できない技ができるようになったときに楽しさや喜びが味わえる克服型の特性を持っている。また，できる技がより上手にできるようになったときに楽しさや喜びが味わえる達成型の特性も持っている。そのことから技のできるできないがはっきりし，児童にとって好き嫌いがはっきり分かれがちな運動でもある。さらに技の系統性がはっきりしているため，1つの技ができないと新しい技の獲得ができず，学習意欲を継続させたり喚起したりするのが難しいという側面もある。

(2) 児童観

体育が好きな児童が多く，ほとんどの運動に対して概ね意欲的に取り組む。しかし今回学習する器械運動については興味・関心が低い児童が少なくない。このことは児童の器械運動領域における技能の習得状況と相関関係が見られる。技能の低い児童については運動経験，遊びの経験の不足が認められる場合が多く，系統性の明確な器械運動の学習において新たな技を習得することは難しい現状である。運動技能の高い児童と低い児童とでは運動の能力と，学習をスタートするにあたってのモチベーションに大きな差が見られる。

また，今年度実施した体育の診断的・総括的授業評価の結果，体育の学習に対して楽しく学習したり，ルールを守って学習したりできていると多くの児童が感じている一方，授業における練習に対して，それが技能の向上に結びついていないと感じている児童も多いことが分かった。つまり「練習してもできるようにならない」と感じている児童が存在するということである。

さらに，児童は自分の課題解決に向け，練習に集中して黙々と取り組むことができる反面，仲間の練習の様子や演技に対して賞賛したり励ましたりする声掛けが少ない。

(3) 指導観

マット運動の特性と本学級の児童の実態を踏まえ、本単元では特にも児童にできた喜びを味わわせると同時に、仲間とともに運動することが心の底から楽しかったと感じられるような学習にしたい。そこで授業力ブラッシュアッププランの体育プロジェクトチームでは、その具現化に向け次の点に留意して指導を進めることを考えた。

- | | |
|---|-------------------------------|
| ア | 運動アナログを育てること |
| イ | 運動(技)コツを理解させ、意識化を図ること |
| ウ | 児童の技能実態や技の運動要素に応じた練習の場を設定すること |
| エ | 仲間との身体接触や交流の機会を意図的に設定すること |

運動アナログは「類似の運動例」と訳される。系統、発展性が明確な器械運動領域においては技のもとになる技能や感覚が十分に身に付いていることが求められる。今回、体育プロジェクトチームではマット運動における運動アナログにはどのようなものがあるのかを洗い出し、精選し、その結果を「マット運動 アナログ集」としてまとめた。それらを指導していくことで、児童の運動や遊び経験に起因する運動技能の個人差に対応しようと考えた。そうすることでどの児童にもできた喜びを与えることができるものと考えた。

器械運動の学習では技ができることを目指すにあたり、「どのような身体の動かし方をすればよいか」という動き方のコツを身に付ける学習が特徴になる。このコツが器械運動で学習する技(教材)のもつ価値につながるものであると考える。その技ができるようになるためにどのようなコツが必要なのかについても体育プロジェクトチームで洗い出し、精選し、その結果を「マット運動 スキル集 『マットくん』」としてまとめた。技の持つ価値を損なうことなく、児童にとって理解しやすい言葉でコツを指導していくことで、どの児童にもできる喜びを与えることができるものと考えた。

器械運動の学習においてはビデオや写真のような機器を利用する以外、自分の技の出来映えを確認することが難しい。まして演技をしながら、自分の身体が今どのような位置にあり、運動の経過として今がどのような局面なのかを理解しながら学習することは至難の業である。そこで学習に参加する全ての児童がコツを共有し、そのコツをもとに教え合いや相互評価をし合うことで、自分の技の出来映えをメタ認知的に理解させようと考えた。具体的には次のような手順で練習を行うものとする。

- ・ 演技者は、自分が気をつけるコツについて周囲の児童に宣言する。
- ・ 宣言をもとに周囲の児童は演技者を観察する。
- ・ 周囲の児童は演技者に感想を伝える。

1つの技ができるようになるためには、その技の開始から終了までに存在する様々な運動要素を洩らさずに身に付けなければならない。例えば、倒立前転は大きく分けると倒立、前転、倒立と前転のつなぎといった局面がある。そしてその中の倒立を1つとっても、手の振り上げ、着手、足の振り上げ、目線の固定等、様々な要素がある。今回の学習ではその運動要素それぞれを練習できるような場を設定するものとする。それらを経験することで児童個々の技能課題に対応することができ、さらにはどの児童にもできた喜びを与えることができるものと考えた。

体育の学習は他教科と比べ、仲間との身体接触や会話の機会が多く、心の交流が図られやすい特性がある。そのことは体育科の学習が、仲間との共生意識や自己肯定感、さらにはコミュニケーション能力を高めるチャンスに満ちているということの意味しているものと考えられる。本単元の指導では、「元気になる言葉」として、体育の学習において自分が仲間にとってほしい言葉を集め、それを集約し、その言葉を遣っていくことを奨励することとする。また練習後に、共に練習した仲間の様子について感想を発表させる。仲間の成長を学級の仲間一同で喜び合う機会を設定し、学級としての共生意識を高めていく一助としたい。

3 単元の目標と評価規準

観 点	目 標	評 価 規 準
態度 (運動への関心・意欲・態度)	自分のめあてに向かって、意欲的に学習に取り組むことができる。 お互いに協力し、教え合い、励まし合いながら学習することができる。	一生懸命練習し、マット運動の楽しさや喜びを味わおうとする。 仲間のがんばりやよさを認め、肯定的な声を掛けながら楽しく練習しようとする。
学び方 (運動についての思考・判断)	自分の課題を達成するために必要な練習の場を選ぶことができる。 仲間の技を評価的に観察することができる。	自分の技のコツや技の成功、失敗の原因を自分なりに考え、練習に生かしている。 仲間の技の出来映えについてコツをもとにコメントしている。
技能 (運動の技能)	技のコツを理解し、スムーズに倒立前転や側方倒立回転ができる。 自分にあった技を選び、連続させたり組み合わせたりすることができる。	倒立前転と側方倒立回転ができる。 倒立前転や側方倒立回転を取り入れて技を連続させたり、組み合わせたりすることができる。

(評価方法：観察，学習カード，形成的授業評価票，診断的・総括的授業評価票)

4 単元の指導及び評価計画 (9時間扱い)

	1	2	3	4(本時)	5	6	7	8	9
主なねらい	学習のねらいや進め方を知る。	倒立前転ができる。			側方倒立回転ができる。			連続技や組み合わせ技ができる。	学習のまとめをする。
関心									
学び方									
技能									
5	オリエンテーション ・マット運動の技の確認(演示, PC) 15 ・単元の見通し, 学習の仕方の確認 25 ・試しの練習(技の復習) 35 40	準備運動と感覚作りの運動							
10		倒立前転の練習	側方倒立回転の練習	連続技・組み合わせ技の練習	連続技・組み合わせ	学習成果の発表			
15									
20									
25									
30									
35									
40		学 習 の 振 り 返 り							
								単元の学習の振り返り	

5 本時の指導（4 / 9）

（1）目標

倒立前転のコツを理解し，補助つきの倒立前転ができる。（技能）

（2）本時の構想

本時は倒立前転の学習の第3時にあたり，児童の技能も大分高まってきていることが予想される。倒立と前転のそれぞれの技ができてもそれをつなぐ技能が未熟な場合，倒立からスムーズな前転に移行できないことが予想される。つなぎの技能を身に付けさせるため，児童同士の補助に掛け声をつけさせたり，コツの共有化を図るために，学習カードを持たせて学習させたりすることで，できるだけ多くの児童に倒立前転の醍醐味を味わわせたい。

（3）本時の評価

具体的評価規準	Aの状況の具体的な姿	Cの状況への手立て
補助つきの倒立状態からスムーズに前転ができる。	単独，または片手補助で倒立前転がスムーズにできる。	できていない部分について教師や仲間が助言し，必要な練習に取り組みさせる。

（4）展開

段階	学習内容・学習活動	指導上の留意点	準備・資料
導入 12分	1 準備運動	<ul style="list-style-type: none"> マット運動に必要とされる部位を意識できるよう声を掛けながら行う。 マット運動に必要な感覚を育てる運動として，手押し車，壁倒立，かえる足打ちゲーム的に行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・リズム太鼓 ・黒板 ・学習カード
	2 感覚作りの運動		
展開 28分	3 課題確認 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 自分に必要な練習の場を選び，上手に倒立前転ができるようになる。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> 全体での課題を確認後，数人に，練習内容や特に練習したい点などを発表させ，本時の課題や練習内容の意識化や方向付けを図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・掲示用資料 ・学習カード ・場の表示 ・マットなどの用具
	4 倒立前転の練習 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 【練習の場】 (1) かべ登り壁倒立 (2) バンザイ壁倒立 (3) 高いところから前転 (4) 壁登り倒立前転 (5) 倒立姿勢のままの倒れ込み (6) 引き上げ補助倒立前転 (7) つかみ補助倒立前転 (8) 補助なし倒立前転 (倒立開脚前転，連続・組み合わせ技の練習を含む) </div>		

<p>展開 28 分</p>		<p>【評価】 補助つきの倒立状態からスムーズな前転ができる。 (練習の様子の観察や学習カードへの記述から評価する)</p> <ul style="list-style-type: none"> A段階と評価できる児童については発展練習として、倒立開脚前転や倒立伸膝前転、倒立前転を含んだ連続技や組み合わせ技に挑戦させる。 	
<p>終末 5 分</p>	<p>5 学習の振り返り 6 次時の学習内容の確認</p>	<ul style="list-style-type: none"> 学習感想を発表させ、自分の練習した技の出来映えや友達の練習の様子について発表させる。また、担任からも練習の様子について感想を話す。 側方倒立回転に取り組むことを伝える。 	

(5) 場づくり

